「日々の理科」（第 2389 号）　2021,-1,26

「ポップコーン・アート（１）」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中　千尋　Chihiro Tanaka

以前、６年生と裏磐梯の林間学校に行った時、雄国沼（おぐにぬま）という湖水の湖畔で、昼食をとった。それも不思議な食事で、与えられた物品で自分で調理して食べるという、サバイバル的な食事だった。配布したものは、カップ麺１人１個、固形燃料、ペットボトルの水、それに簡易鍋である。この簡易鍋には、即席ポップコーンのアルミ容器を使った。その為にわざわざ学校でポップコーンを作って、鍋だけ保管しておいたのだ。

スーパーで売っている即席のポップコーンは、アルミの簡易鍋に、バター、食塩、ポップコーン用のトウモロコシが入っている。ガスレンジや電気コンロにかけるだけで、数分でアツアツのポップコーンができる。中ではポンポンはじける音がして面白い。

ポップコーン用のトウモロコシ（種子）は、硬い種皮の中に、でん粉や水分が閉じこめられていて、加熱すると水分が気化して膨張する。それが種皮の強度に勝った瞬間、爆発するのである。ポップコーンの「ポップ pop」はこの時の「破裂音」のことだ。

「１袋で 100 人分」というところがすごい

ポップコーンといえば、映画館の売店で売っている菓子の定番だ。柔らかくて音がしにくい、映画がつまらなくて怒った観客がスクリーンに投げても破損しにくいというのが理由だという。

私も子どもの頃からポップコーンが好きだった。近年は「バター醤油味」「うま味塩味」など、さまざまな味があり、ついつい手が出てしまう。先日もコンビニで買ってきて、開封してふと見たら、なかなか面白い形のものが多い。

これは「ワンちゃん」子犬がおすわりしている姿に似ている。大きな耳も二つついていた。きれいに写真に撮るのが、なかなか大変だった。

これはミッキーの顔。確かディズニーランドでも、移動スタンドで作った、大きな容器のポップコーンを売っている。よく研究して、全部のポップコーンの粒がミッキーの形をしていたら、売り上げが倍増するだろう。ついでにドナルドとグーフィーもほしい。